

比恵 51

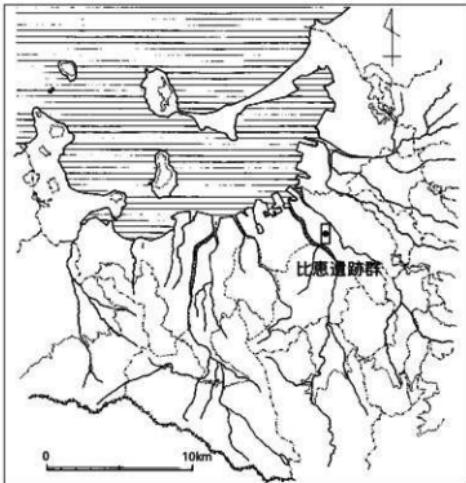
—比恵遺跡群第107次調査報告—

2008

福岡市教育委員会

比恵 51

— 比恵遺跡群第107次調査報告 —



遺跡略号 HIE-107
調査番号 0628

2008

福岡市教育委員会

序

福岡市には多くの文化財が分布しており、本市では文化財の保護、活用に努めています。しかし本市では各種の開発事業も多く、やむを得ず失われる文化財については記録保存のための発掘調査を行っています。

本書は共同住宅建設に先立って調査された比恵遺跡群第107次調査の報告です。発掘調査の結果、弥生時代を中心とした遺構・遺物が見つかりました。比恵遺跡群は旧石器時代から人々が生活し、また、弥生時代から古墳時代前期には福岡平野の中核の一角を占める遺跡でした。また、「那津官家」推定遺構も確認され、古代においても一つの拠点でした。

本調査は比恵遺跡群の北東側にあたる部分の調査で、弥生時代後期から終末期の井戸などが発見されました。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野での一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から資料整理にいたるまでご理解とご協力をいただいた、照栄建設株式会社をはじめとする関係各位に対し、心から感謝の意を表する次第です。

平成20年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 山 田 裕 嗣

例　言

1. 本書は共同住宅建設に先立って、福岡市教育委員会が、2006年7月3日～7月25日にかけて行った比恵遺跡群第107次調査の発掘調査報告書である。
2. 検出した遺構については、調査時に遺構を示す記号Sを付して検出順にS-1,S-2,のように通し番号をつけた。本文ではこの番号に遺構の性格を示すアルファベットをSのあとに付しSK-1のように記述する。
3. 本書で使用する方位は真北である。
4. 本書で使用した遺構・遺物実測図は福岡市教育委員会埋蔵文化財第一課 赤坂亨・池崎譲二・本田浩二郎が作成し、製図は赤坂・上方高弘・石水久美子が行った。
5. 本書で使用した写真是、赤坂・上方高弘が撮影した。
6. 本書の執筆・編集は赤坂が行った。
7. 弥生土器の時期比定には以下の文献を参照した。
武末純一1987「須玖式土器」『弥生文化の研究』4『弥生土器 II』a 雄山閣
柳田康雄1987「高三浦式と西新町式」『弥生文化の研究』4『弥生土器 II』a 雄山閣
8. 報告書抄録は裏表紙に記載した。
9. 本報告の記録類、出土遺物は収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので活用されたい。

遺跡調査番号	0628	遺跡略号	HIE-107
地番	福岡市博多区博多駅南5丁目132	分布地図番号	東光寺37
開発面積	306.94m ²	調査対象面積	141.98m ²

本文目次

I . はじめに	
1 . 調査にいたる経過.....	1
2 . 調査の組織.....	1
II . 遺跡の立地と環境.....	3
III . 調査の記録	
1 . 概要.....	5
2 . 履序.....	5
3 . 遺構・遺物.....	6
IV . 小結.....	11

挿図目次

第1図 比恵遺跡群の位置と地形 (1/5,000)	2
第2図 比恵遺跡群第107次調査位置図 (1/1,000)	4
第3図 比恵遺跡群第108次調査全体図 (1/80)	6
第4図 SE-1・SK-2・SE-3・SE-4・SK-5 (1/40)	8
第5図 比恵遺跡群第108次調査出土遺物1 (1/3)	9
第6図 比恵遺跡群第108次調査出土遺物2 (1/3・1/2・2/3)	10

図版目次

PL1	1 . 調査区東側全景 (北西から)
	2 . 調査区西側全景 (北西から)
PL2	1 . SE-1 (北東から)
	2 . SE-2 (北東から)
	3 . SE-4 (北西から)
PL3	1 . SE-3土器出土状況 (南西から)
	2 . SE-3完掘状況 (南西から)
	3 . 調査風景 (南から)

I . はじめに

1 . 調査にいたる経過

平成18年4月20日付けで照栄建設株式会社より福岡市教育委員会埋蔵文化財第一課宛に福岡市博多区博多駅南5丁目132の物件に関して、共同住宅建設に関する埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号18-2-86）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群（分布地図番号37 東光寺 0127 遺跡略号HIE）に含まれている地点であり、この申請を受けて埋蔵文化財課では申請者と協議の上、平成18年5月24日に申請地内の試掘調査を行い、現地表面下20cmで柱穴と思われる遺構を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財第一課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。その結果、建物の構造上遺構の破壊が避けられないため、平成18年度に発掘調査、平成19年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。なお調査対象としたのは開発面積306.94m²のうち、共同住宅建築部分の141.98m²である。

調査期間は平成18年7月3日から7月25日までである（調査番号0628）。調査面積は122.8 m²、遺物はコンテナ3箱分出土している。また、整理作業と報告書の刊行は平成19年度に行った。

現地での発掘調査にあたっては照栄建設株式会社をはじめとする関係の皆様から発掘調査について御理解いただくと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して深い感謝の意を表します。

2 . 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

事業主体 照栄建設株式会社

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財第一課

平成18年度

調査総括 山口讓治（埋蔵文化財第一課長）

山崎龍雄（埋蔵文化財第一課調査係長）

調査庶務 文化財管理課 鈴木由喜

調査担当 埋蔵文化財第一課調査係 赤坂亨

調査作業 水田ミヨ子 酒井康恵 草場恵子 村山巳代子 西村寿美枝 安東昌信 許斐拓生

永田とみ子 上野照明 藤村正勝 定直康浩

平成19年度

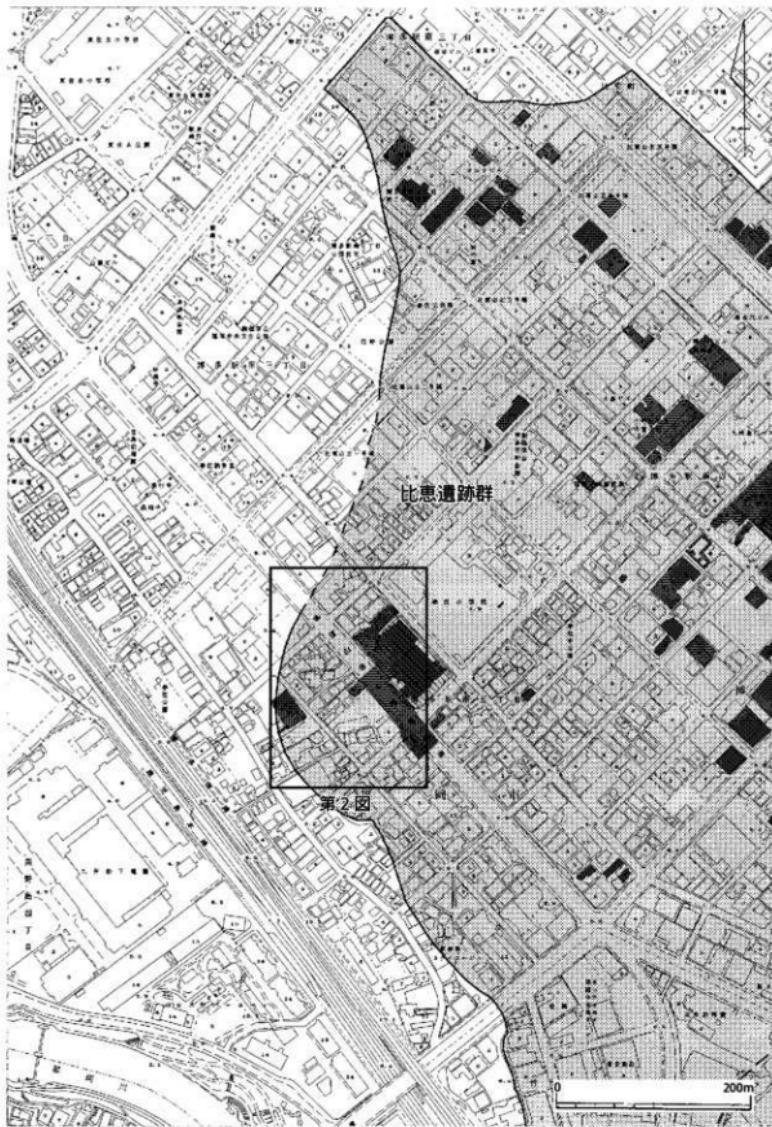
総括 山口讓治（埋蔵文化財第一課長）

米倉秀紀（埋蔵文化財第一課調査係長）

庶務 文化財管理課 鈴木由喜

整理担当 福岡市博物館学芸課 赤坂亨

整理作業 石水久美子 小田敬子



第1図 比恵遺跡群の位置と地形 (1/5,000)

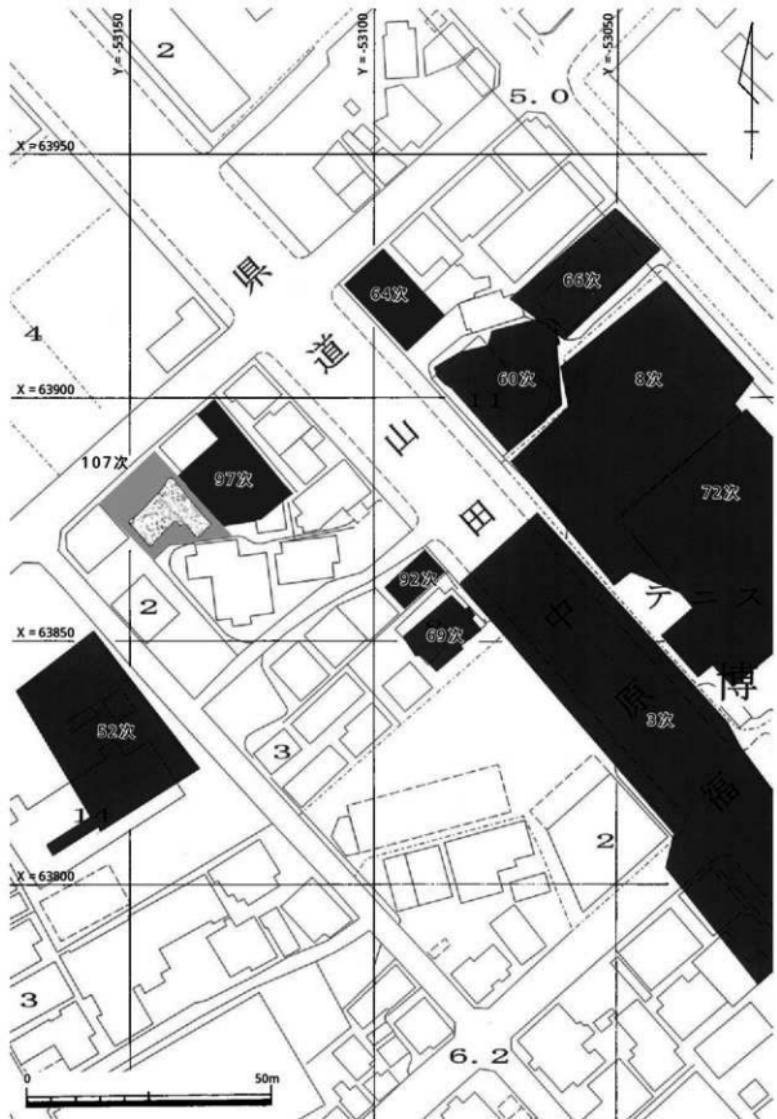
II. 遺跡の立地と環境

比恵遺跡群は福岡平野を流れる那珂川と御笠川に挟まれた洪積台地上に位置する。この台地は阿蘇山の火碎流の堆積物からなり、堆積物上部の暗赤褐色土を鳥栖ローム層、下部の乳白色粘土層を八女粘土と呼んでいる。比恵遺跡群をはじめ、那珂、諸岡、板付、麦野、五十川、井尻B遺跡もこの鳥栖ローム層上の遺跡である。比恵遺跡群は都市化の進行著しい地域であり、現状では旧地形を留めていないが、本来は比恵遺跡群には台地に樹状に枝谷が入り込む地形をしていたことが判明している。第107次調査地点は比恵遺跡群の北西端にあたる場所で、現在の春住小学校より西側は、比恵遺跡群の大半の位置する台地と河川の影響によって切り離され、島状を呈していたと推定されている。本調査地点はこの島状の台地の北東に向かって傾斜する縁辺部であった(第1図)。

比恵遺跡群は那珂遺跡群と一緒に遺跡で、弥生時代～古墳時代および6・7世紀にかけて栄えた集落遺跡であり、現在までに112次にわたる調査が行われた。本調査地周辺では第3・8・52・60・64・66・69・72・92・97次調査が行われている(第2図)。第3・72次調査からは6世紀後半～7世紀後半の柵状遺構・総柱建物が検出され、「那津官家」関連遺構と推定されている。第8次調査からは、弥生時代前期の貯蔵穴・竪穴式住居、弥生時代中期初頭～後期の甕棺、後期の竪穴式住居・井戸、5世紀代の竪穴式住居、5世紀後半～6世紀中頃の掘立柱建物・井戸が検出された。第52次調査は本調査地点の南50mに位置する。第52次調査からは、古墳時代後期後半の整地層の可能性のある包含層、溝、弥生時代の土坑が検出された。第60次調査は本調査地点の北東北70mに位置する。第60次調査からは弥生時代中期の竪穴式住居・甕棺・土坑墓・井戸、後期～終末期の竪穴式住居・井戸、古墳時代前期初頭の土坑、奈良時代前半の溝、古代末～中世初頭の井戸が検出された。第64次調査は本調査地点の北東60mに位置する。第64次調査からは弥生～古墳時代のピット・井戸・柱穴・土坑が検出された。第66次調査は本調査地点の北東100mに位置する。第66次調査からは弥生時代中期の井戸、弥生時代終末～古墳時代初頭の墓坑、古墳時代前期の土坑、後期の土坑、古墳時代以降の井戸が検出された。第69次調査は本調査地点の南東50mに位置する。第69次調査からは弥生時代後期の井戸、弥生時代前期の弥生時代前期の貯蔵穴が検出された。第72次調査は本調査地点の東100mに位置する。第92次調査は本調査地点の東南東50mに位置する。第92次調査からは弥生時代前期の貯蔵穴、弥生時代後期の井戸が検出された。第97次調査は本調査地点の北東に隣接している。第97次調査からは弥生時代中期～後期の井戸・掘立柱建物、古代の大型総柱建物跡・大型建物跡が検出されている。

比恵遺跡群報告書・参考文献

- 第3・72次 長家伸ほか2001『比恵29』福岡市埋蔵文化財調査報告書第663集
第8次 柳沢一男1985『比恵遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第116集
第52次 宮井善朗1995『比恵遺跡群(18)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第404集
第60次 大庭康時1995『第60次調査』『比恵遺跡群(18)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第404集
第64次 福岡市教育委員会埋蔵文化財課1999『福岡市埋蔵文化財年報Vol.12』
第66次 福岡市教育委員会埋蔵文化財課2000『福岡市埋蔵文化財年報Vol.13』
第69次 長家伸1995『比恵遺跡群第69次発掘調査報告』『比恵30』福岡市埋蔵文化財調査報告書第671集
第92・97次 福岡市教育委員会埋蔵文化財課2006『福岡市埋蔵文化財年報Vol.19』



第2図 比恵遺跡群第107次調査位置図 (1/1,000)

III . 調査の記録

1 . 概要

平成18年7月3日、調査区全面のバックホウによる表土剥ぎを行う。地表から遺構面までが浅く、調査区北側の調査範囲外に廃土を全て積み上げることが可能であったため、土砂反転無しで調査を行うこととした。調査地内は既存建物の影響で搅乱が多くあり、人力で除去できないコンクリート基礎などはバックホウによって除去した。7月4日および5日に機材搬入し場内の条件整備を行う。梅雨の季節であり、また調査地が道路に向かってわずかに傾斜している土地であったため、土砂を含んだ雨水が道路に流れないように注意した。条件整備後の7月5日より、人力による掘削作業を開始した。最初は全体に遺構検出を行い、遺構と搅乱とを弁別した。その後排水用のパイプ、排水溝、ゴミ廃棄孔などの搅乱除去を行った。搅乱除去後、遺構の掘り下げを開始した。遺構はそれほど多くないものの、調査期間は梅雨末期で好天と雨天を繰り返しており、晴れると遺構面がひび割れ、遺構覆土が硬化した。また雨天では調査区の低い部分が水没するなどを繰り返し、作業がなかなか進まない日が続いた。7月18日、遺構完掘し、個別遺構の写真撮影を行った。7月19日より遺構の1/20実測図の作成を行い、7月23日に遺構の作図を完了した。7月24日、調査区全体の高所作業車による写真撮影を行った。清掃時は曇天であったが、高所作業車到着頃から降雨し始めた。そのため全体写真では一部遺構が水没した状態となってしまった。全体写真撮影後、機材の撤収を行った。7月25日、調査区全体をバックホウで埋め戻し、調査を終了した。

遺構は井戸を1基、土坑（住居跡の一部か）1基、ピット70数基を検出した。ピットの一部は掘立柱建物になる可能性がある。ほかに弥生時代中期～後期の土器と黒曜石の破片が出土している。遺物はコンテナ3箱分出土した。

座標は国土座標を用いた。座標は光波測定器を用い、基準点T15を器械点・T16を方向点とする結合トラバースにより調査区内へ座標移動を行った。なお基準点T81・T74の国土座標は平成4年3月に西技測量設計株式会社の行った博多地区遺跡基準点測量委託の測量成果に基づいている。

2 . 層序

本調査地点では部分によって差があるが、現表土下10cm前後～30cmで鳥栖ローム層の遺構面になる。特に調査区北側は表土がほとんどなく、表土ほぼ直下が遺構面となった(PL3-3)。表土はコンクリートなども含む現代のもので、遺構面そのものが大きく搅乱を受けていて遺構の残存状況も不良である。標高は最も高い調査区南東側で5.600m、最も低い調査区北西側で5.300mを測る。遺構面は全体に南東側から北西側にむかってわずかに傾斜している。現在の地形もほぼ同様で、北西側に傾斜している。



第3図 比恵遺跡群第108次調査全体図 (1 / 80)

3. 遺構と遺物

本調査地点の遺構面は1面のみである。本報告では遺構数が少ないため、遺構種別順ではなく遺構番号順に記述を行う。なお全体図および個別遺構図の破線は搅乱を示している。

井戸SE-1 (第4図・PL2-1)

調査区南東側、標高4.600m付近で検出した。0.7m×0.6m深さ0.4mを測る平面略楕円形の井戸である。遺構の覆土は黒褐色土である。建物の基礎をバックホウで除去した、その下から検出された。

そのため遺構面から1.2m下までの遺構の状態は不明である。

遺物は甕口縁部(6)、石包丁破片(11)が出土した。6は反転復元による推定径21.7cmを測る。口縁部に幅広のハケ調整を施す。色調は褐色～淡褐色を呈する。時期は弥生時代後期後半である。7は輝緑凝灰岩製で、石包丁の約半分が残ったものである。4.0cm×5.0cm、厚さ5mmを測る。

遺構の時期は弥生時代後期か。

井戸SE-2（第4図・PL2-1）

調査区南東側、標高5.400m付近で検出した。直径0.7m深さ0.9mを測る平面円形の井戸である。底面は径0.4mの隅丸方形を呈し、壁はゆるやかに外側へ広がりつつ、立ち上がっている。遺構の覆土は黒褐色土である。

図化可能な遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

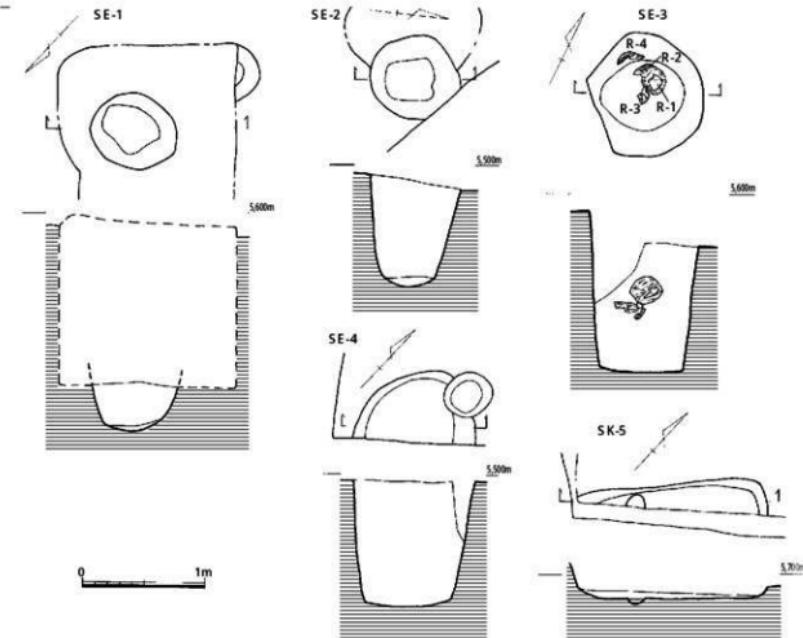
井戸SE-3（第4図・PL3-1,3-2）

調査区南東端、標高5.200m付近で検出した。当初、調査区内で検出したのは井戸の半分であったが、井戸の残りの部分のみ調査区を拡張し、井戸の全体を調査した。直径約1.0m深さ1.1mを測る平面円形の井戸である。底面は0.7×0.6mの平面梢円形を呈し、壁はゆるやかに外側へ広がりつつ、立ち上がっている。遺構の覆土は黒褐色土である。

遺物は井戸の中層、標高4.500m前後で広口壺口縁部(1・取上番号R-3)、小型壺(2・取上番号R-3)、壺胴部片(3・取上番号R-4)、壺底部片(4・取上番号R-1)、壺胴部片(5・取上番号R-2)が出土した。3は下層出土の土器片と接合した。その他に黒曜石碎片(15)が出土している。1は反転復元による推定径35.8cmを測る。口縁部の内側が破損している。赤色顔料が塗布されており、口縁平坦面はハケ調整を、口縁下部はナデ調整を施す。2は反転復元により全体の形状を復元したもの。推定口径10.0cm、胴部径12.4cm、底径6.7cm、高さ16cmを測る。色調は赤褐色～褐色を呈する。口縁部はヘラナデ調整、頸部は指ナデとヘラナデ調整、胴部は幅広のハケ調整の後、ヘラまたは指ナデ調整を施す。底部は平底で、底外面にハケ・ナデ調整を施す。内面は指ナデ調整である。3は壺の頸部から胴部までの破片で、反転復元により全体の形状を復元した。遺存状態は不良である。推定で頸部径15.0cm、胴部径32.0cmを測る。色調は淡橙色～淡赤褐色を呈する。突帯の断面は三角形である。外面は全体に幅広のハケ調整を施す。内面もハケ調整を施すが、頸部と胴下部は摩滅していて調整不明である。4は底径10.3cmを測る。色調は灰褐色を呈する。外面は底面付近では指オサエとナデ調整を、その他の部分では幅広のハケ調整を施す。内面は底面付近では指オサエとナデ調整を、その他の部分ではヘラナデ調整を施す。底外面はハケ調整を施す。5は壺の胴部片で、反転復元により全体の形状を復元した。推定で胴部径32.0cmを測る。色調は暗褐色を呈する。突帯の断面は三角形である。内外面とも全体にハケ調整を施す。突帯上にもハケ調整がなされており、突帯接合後に施したものである。15は背面がボジ面で、素材剥片のバレフ付近を横から剥離している。石器製作時の調整碎片か。土器は須玖I式であり、15は弥生時代前期後半～中期前半期とみられる。遺構の時期は弥生時代中期前半である。

井戸SE-4（第4図・PL2-3）

調査区中央部分、標高5.500m付近で検出した。井戸の半分であり、径1.0mの平面円形になると思われる。深さ1.0mを測る。底面は0.7mの平面円形を呈し、壁はゆるやかに外側へ広がりつつ、立ち



第4図 SE-1・SK-2・SE-3・SE-4・SK-5 (1/40)

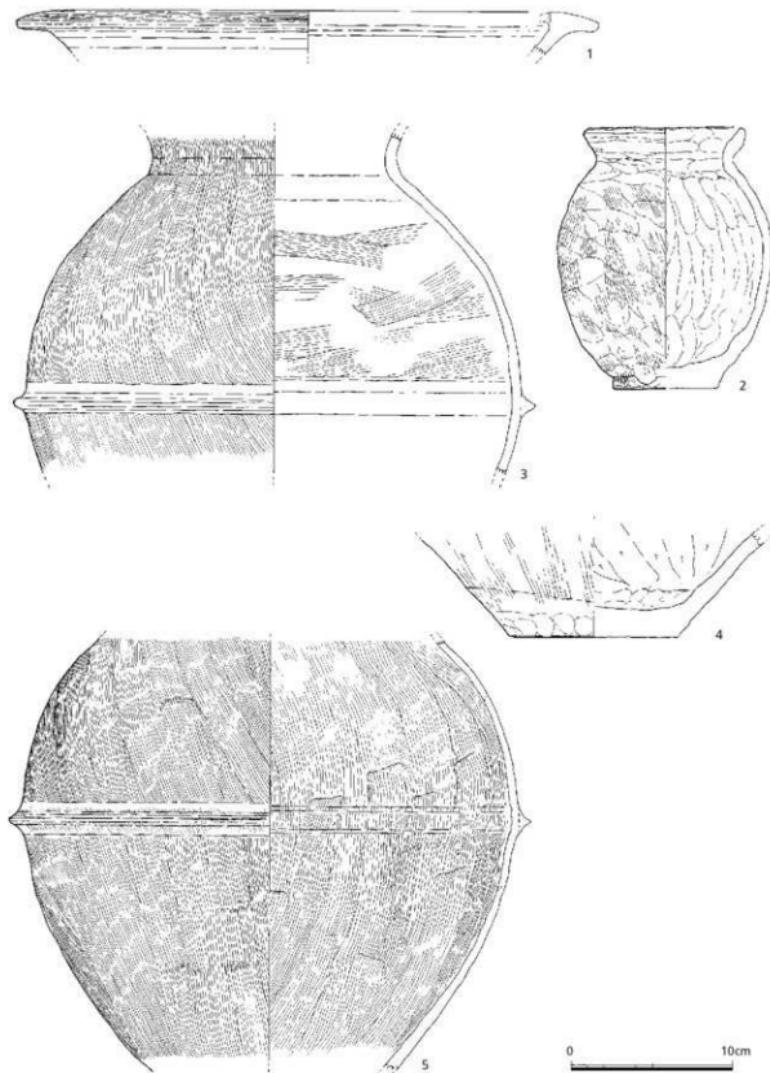
上がっている。遺構の覆土は黒褐色土である。

遺物は甕口縁部片(7)、壺(8)、黒曜石碎片(14)が出土した。7は反転復元による推定径19.0cmを測る。色調は外面が淡橙色、内面が黒褐色を呈する。口縁部はナデ調整を、口縁下部内外面ともヘラナデ調整を施す。8は反転復元により全体の形状を復元したもの。推定で口径11.0cm、胴部径16.9cmを測る。色調は外面が褐色、内面が橙色を呈する。口縁部は外面ナデ調整、内面幅広のヨコハケ調整を施す。胴部は外面ハケ調整の後一部にミガキ調整、内面細かいヨコハケ調整を施す。14は剥片の折断碎片である。7は奈良～平安時代の土師器、8は弥生終末～古墳初頭、14は弥生時代前期後半～中期前半期とみられる。遺構の時期は弥生終末～古墳初頭であろう。

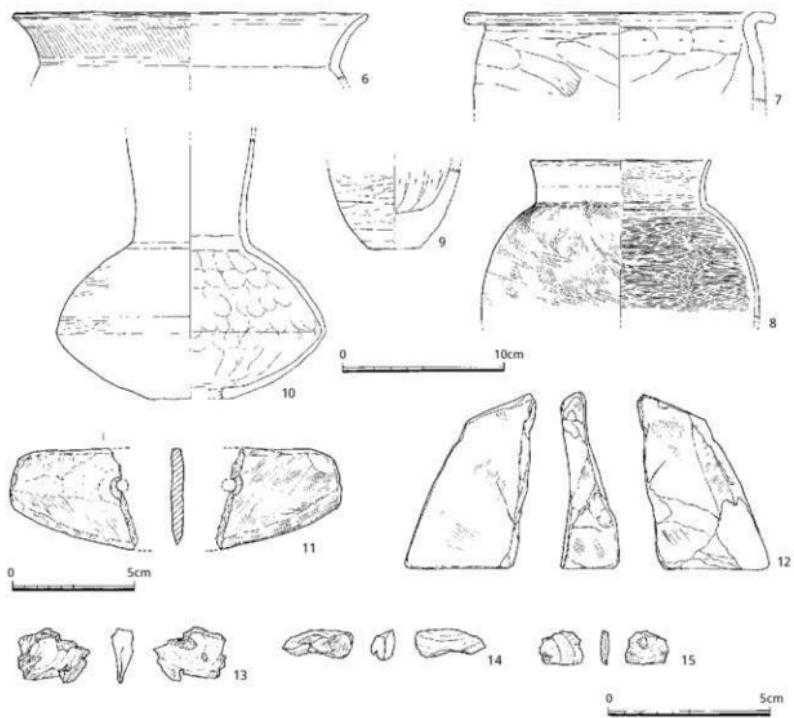
土坑SK-5(第4図)

調査区南東端、標高5.600m付近で検出した。遺構の大部分が調査範囲外にある。1.5m×0.2m以上を測る平面方形と想定される土坑の北隅である。深さ10cmを測り、底面はほぼ水平である。竪穴式住居の一部の可能性がある。

図化可能な遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。



第5図 比惠遺跡群第108次調査出土遺物1(1/3)



第6図 比恵遺跡群第108次調査出土遺物2(1/3・1/2・2/3)

ピット・遺構外出土遺物（第6図）

調査区北側P-8から手捏ね土器(9)が、調査区中央P-14から長頸壺(10)が、調査区西側P-34から砥石(12)が、調査区北側P-3から黒曜石剥片(13)が出土した。9は底径3.2cmを測る。色調は褐色を呈し、全体にやや摩滅を受ける。外面はナデ調整の後、一部ミガキ調整を施す。内面は指ナデ調整を施す。時期は不明。10は反転復元により全体の形状を復元したもの。推定で頸部7.0cm、胴部径16.4cm、底径5.0cmを測る。色調は灰褐色を呈する。遺存状態は不良である。頸部は内外面とも摩滅のため調整不明。胴部外面にはややラミガキが残る。胴部内面は指オサエと指ナデ調整を施す。時期は弥生時代後期後半である。12は石英粗面岩(流文岩)?で、7.0×5.2cm、厚さ2.3cmを測る。鉄器等の仕上げ用の砥石か。時期は不明。13は自然面折面の不整形な横長剥片である。時期は弥生時代前期後半～中期前半期とみられる。

IV. 小結

本調査地点からは弥生時代中期前半の井戸1基、弥生時代後期の井戸1基、弥生終末～古墳初頭の井戸1基、時期不明の井戸1基・土坑1基を検出した。この遺構数は、島状台地の中央部や隣接地である97次調査などと比較しても少なく、本調査地点は比恵遺跡群北東縁辺部でも遺構の密度が薄い場所だったと推定される。

また本調査地点の主に北・北東側ではピットが多数検出された。時期は不明なものが大半だが、古代の土師器が出土していることと、隣接する第97次調査で古代の大型総柱建物跡・大型建物跡が検出されていることから、この検出したピットのうちのいくつかは掘立柱建物になると思われる。建物の復元を試みたが、復元することができなかった。ただ、傾向としておよそ東西方向、もしくは東北東～西南西方向に並ぶピットが多いことを指摘しておきたい。

図 版



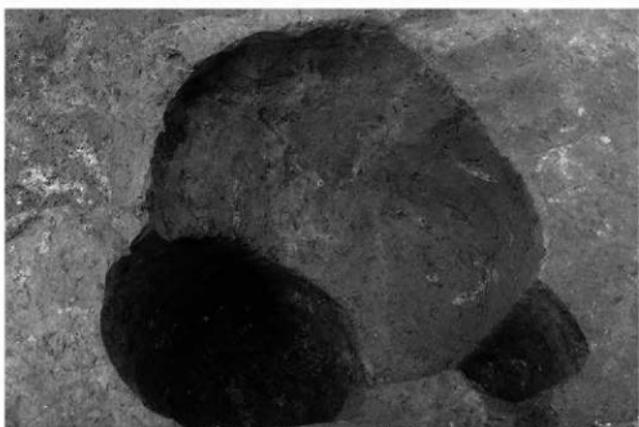
1. 調査区東側全景（北西から）



2. 調査区西側全景（北西から）



1 . SE-1 (北東から)



2 . SE-2 (北東から)



3 . SE-4 (北西から)



1 . SE-3土器
出土状況
(南西から)



2 . SE-3
完掘状況
(南西から)



3 . 調査風景 (南から)

報告書抄録

ふりがな	ひえ							
書名	比恵51－比恵遺跡群第107次調査報告－							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	1001							
編著者名	赤坂亨							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1							
発行年月日	西暦2008年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ° °	° ° °			
比恵遺跡群 第107次	福岡県福岡市 博多区博多駅 南5丁目132	40130	0127	33 34 41	130 25 30	20060703 ～ 20060725	122.8	共同住宅 建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・主な遺物					特記事項
比恵遺跡群 第107次	集落	弥生時代	集落－弥生時代／井戸4土坑1－弥生土器片+石器					
要約	本調査地点からは弥生時代中期前半の井戸1基、弥生時代後期の井戸1基、弥生終末～古墳初頭の井戸1基、時期不明の井戸1基・土坑1基を検出した。この遺構数は、島状台地の中央部や隣接地である97次調査などと比較しても少なく、本調査地点は比恵遺跡群北東縁辺部でも遺構の密度が薄い場所だったと推定される。また本調査地点の主に北・北東側ではピットが多数検出された。この検出したピットのうちのいくつかは掘立柱建物になると思われるが、復元することができなかった。							

比恵 51

－比恵遺跡群第107次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1001集

2008年（平成20年）3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1
(092) 711-4667

印刷 (株)大里印刷センター
福岡市東区二又瀬新町12-29
(092) 611-3118